

礼拝のあり方

詩篇 95-96 篇

はじめに

私たちの教会では、毎月テーマを決めています。そして毎月、第一週の礼拝の説教では、その月のテーマに従ってお話ししています。8月のテーマは、「礼拝」となっています。

今日は、詩篇 95 篇と 96 篇から、「礼拝のあり方」について学びたいと思います。

詩篇 95 篇と 96 篇は、礼拝の冒頭の「招きの言葉」でよく用いられます。実際に、イスラエルの民の礼拝においても、この詩篇は用いられていたようです。

1. 喜び・感謝・賛美

詩篇 95 篇も 96 篇も、最初は賛美を促す言葉で始められています。95：1-2 にはこうあります。「さあ、主に向かって、喜び歌おう。私たちの救いの岩に向かって、喜び叫ぼう。感謝をもって、御前に進み、賛美をもって、主に喜び叫ぼう」。また 96：1-3 にはこうあります。「新しい歌を主に歌え。全地よ、主に歌え。主に歌え、御名をほめたたえよ。日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ。主の栄光を国々の間で語り告げよ。その奇しいみわざを、あらゆる民の間で」。

礼拝は、賛美をもって始まります。主なる神様に向かって、感謝と喜びに満ちた賛美をさげることによって礼拝を始めていくのです。

ここで大切なことは、「主に向かって」賛美をさげるということです。95 篇には、「主に向かって」「私たちの救いに向かって」とありますし、96 篇には「主に歌え」「主に歌え」「主に歌え」と三回繰り返されています。

私たちは礼拝で讃美歌を用いますが、讃美歌を歌うことが目的ではありません。讃美歌を用いて、神様を賛美することが目的なのです。ですから礼拝においては、ただ讃美歌を歌うのではなく、「神様に向かって」讃美歌を歌うことが大切なのです。私たちの賛美を神様が聞いてくださっている、神様に届いている、そういう確信をもって歌うことが大切なのです。

その意味で賛美は、第一義的には、自分のために歌うものではありません。自分が恵まれるため、自分が満たされるためのものではありません。自分が恵まれるため、自分が満たされるためであるなら、その賛美は「自分に向かって」いると言えます。確かに心から賛美を歌う時、私たちは恵まれ、満たされます。しかしそれは、心から「神様に向かって」賛美を歌う時に、恵まれ、満たされるのです。賛美は私たちだけで完結してはいけません。賛美は「神様に向かって」歌わなければなりません。

では私たちは、なぜ神様に向かって賛美を歌うのでしょうか。95：3-5 にはこうあります。「まことに主は大いなる神。すべての神々にまさって、大いなる王である。地の深みは御手のう

ちにあり、山々の頂も主のものである。海は主のもの、主がそれを造られた。陸地も御手が形造つた」。また 96：4-6 にはこうあります。「まことに主は大いなる方。大いに賛美される方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。まことに、どの民の神々も、みな偽りだ。しかし主は天をお造りになった。威厳と威光は御前にあり、力と輝きは主の聖所にある」。

「まことに」という言葉は、「なぜなら」という意味の言葉です。ですから、今読んだ御言葉は、私たちが神様に向かって賛美を歌う理由が書かれているのです。それは、神様が大いなる方だからです。世界には、様々な神々が崇められていますが、それらはどれも偽りで、主なる神様こそ力と栄光に満ちた唯一の神様です。なぜ主なる神様だけが、唯一の神だと言えるのでしょうか。それは、主なる神様が世界を造られた方だからです。海も陸地も、主なる神様が造られ、地の深みも、山々の頂も神様の御手の中にあり、神様のものだからです。主なる神様こそ、すべてを造られた創造者であり、すべてを治め支配しておられる大いなる王だからこそ、賛美されるべき唯一の方なのです。

2. ひれ伏し・ひざをかがめ・ひざまずこう

では、神様に向かって、感謝と喜びに満ちて賛美を歌った後、礼拝では何をするべきでしょうか。95：6 にはこうあります。「**来たれ。ひれ伏し、ひざをかがめよう。私たちを造られた方、主の御前にひざまずこう**」。礼拝では、感謝と喜びに満ちて賛美を歌うだけでなく、主なる神様の御前に、ひれ伏し、ひざをかがめ、ひざまずくことが大切です。実際に、そのような動作をするかは別として、ここで大切なことは、神様の前に自分を低くして、へりくだるということです。私たちは、感謝と喜びを表現すると同時に、へりくだるという姿勢が大事なのです。私たちの通常の礼拝では、「罪の告白」の時があります。この時が、自分を低くして、へりくだる時と言えます。感謝と喜びに満ちた賛美だけでなく、御前に静まってへりくだる時が礼拝には必要なのです。

では私たちは、なぜ神様の御前で自分を低くして、へりくだるのでしょうか。95：7 にはこうあります。「**まことに、主は私たちの神。私たちは、その牧場の民、その御手の羊**」。ここにも、「なぜなら」という意味の「まことに」という言葉がありますから、ここには、私たちが神様の御前で自分を低くして、へりくだる理由が書かれています。それは、主なる神様が私たちの神様となってくださいり、私たちの羊飼いとなってくださったからです。神様は、イエス様の尊い命を贖いの代価として、私たちを買い取り、御自身の民、御自身の羊としてくださいました。そして、私たちを悪から守り、私たちの魂を養い、私たちの人生を今も導いてくださっています。だからこそ私たちは、自分の罪深さ、弱さを認めて、神様の御前に自分を低くして、へりくだる必要があるのです。

3. 今日、もし御声を聞くなら

では、賛美を歌い、神様の御前に自分を低くして、へりくだる時に続いて、礼拝では何をするべきでしょうか。95：7-13 にはこうあります。「**今日、もし御声を聞くなら。あなたがた**

の心を頑なにしてはならない。メリバでのように、荒野のマサでの日のように。あなたがたの先祖は、そこでわたしを試み、わたしを試した。わたしのわざを見ていたのに。四十年の間、わたしはその世代を退け、そして言った。『彼らは心の迷った民だ。彼らはわたしの道を知らない。』そのため、わたしは怒りをもって誓った。『彼らは決して、わたしの安息に入れない』』。

ここに、「今日、もし御声を聞くなら。あなたがたの心を頑なにしてはならない」とあるように、賛美とへりくだりと共に、礼拝では神様の御言葉を聞かなければなりません。私たちの羊飼いとなってくださった神様の声に、私たち羊は聞き従わなければなりません。だからこそ礼拝では、「聖書朗読」と「説教」の時があります。

この時に私たちが注意しなければならないのは、「心を頑なにしてはならない」ということです。イスラエルの民は、エジプトの奴隸状態から救われて、荒野を旅している時に、神様を試みました。荒野は水を得ることが困難なので、イスラエルの民はモーセに不平を言い、モーセを石で打ち殺そうとしました。しかし神様は、岩から水を出してイスラエルの民に水を飲ませたのです。これがメリバ、荒野のマサでの出来事です。

イスラエルの民は、エジプトから脱出する時に、神様の数々の御業を見て來たのです。しかし彼らは、羊飼いである神様を信頼せず、不平を言って、神様の御言葉に聞き従わず、神様を疑ったのです。荒野からカナンの地に 12 人が偵察に行った時もそうです。ヨシュアとカレブ以外の 10 人は、カナン人を恐れて、安息の地であるカナンには入れないと言って、人々の心を惑わしたのです。その結果、彼らは神様の怒りを買い、四十年の間、荒野を旅することになりました。そして、神様を試みた人たちは荒野で死に絶え、安息の地であるカナンに入ることができなかったのです。

確かにイスラエルの民が目の前にした現実は、厳しいものでした。目の前には、水のない荒野が広がり、強そうに見えるカナン人がいました。その中で彼らは、神様の数々の御業を忘れ、神様を疑ったのです。神様の御言葉の約束に信頼しなかったのです。その結果、彼らは神様の怒りを買い、安息を得ることができませんでした。

私たちは礼拝で、どのように御言葉を聞かなければならぬのでしょうか。詩篇 95 篇が教えているのは、心を頑なにせずに御言葉を聞くということです。イスラエルの民の教訓から学び、神様の御言葉を信頼して、疑わずに聞くということです。たとえ目の前に見える現実が厳しく、希望が持てなかつたとしても、神様の御言葉の約束に希望を持ち、信仰をもつて受け入れ、聞き従うということです。

私たちは神様の御言葉から二つのことを聞き取らなければなりません。一つは、私たちは神様について何を信じなければならないか、ということです。もう一つは、神様は私たちに何を求めておられるか、ということです。神様の御言葉が私たちに求めていることは、信仰と服従です。私たちは毎週の礼拝において、たとえ試練の中にあったとしても、心を頑なにせずに、神様の御言葉を信じ、従うことが大切なのです。そのようにしてこそ、私たちは安息へと導かれていくのです。

4. 諸国の人に向かって

最後に、礼拝において大切なことは、伝道するということです。詩篇 96 篇では、「**全地よ、主に歌え**」(96:1)「**日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ**」(96:2)「**主の栄光を国々の間で語り告げよ。その奇しいみわざを、あらゆる民の間で**」(96:3)「**もうもろの民の諸族よ、主に帰せよ**」(96:7)「**全地よ、主の御前におののけ**」(96:9)「**国々の間で言え。『主は王である。まことに、世界は堅く据えられ揺るがない。主は公正をもって諸国の民をさばかれる』**」(96:10)とあります。

主なる神様を礼拝することは、私たちクリスチャンにだけ求められていることではありません。全世界の人々に求められていることなのです。神様はやがて全世界の人々を裁かれます。96:13 にはこうあります。「**主は必ず来られる。地をさばくために来られる。主は、義をもって世界を、その真実をもって諸国の民をさばかれる**」。神様はやがて、神様を真実に礼拝しない人々を裁かれます。だからこそ私たちは、すべての人に「御救いの良い知らせ」を告げて、主なる神様に対する礼拝へと招かなければならぬのです。私たちは、自分たちのためだけに礼拝してはなりません。多くの人を救い、礼拝に招くためにこそ、私たちは礼拝しなければならないのです。その意味で、礼拝は伝道の場であるべきです。

おわりに

今日は、詩篇 95 篇と 96 篇から、「礼拝のあり方」について学びました。礼拝は、喜びと感謝に満ちた賛美から始まります。私たちは賛美において、しっかりと「神様に向かって」賛美を歌うことが大切です。

喜びと感謝に満ちた賛美の後には、私たちは神様の御前で静まることも大切です。私たちは、自分の罪と弱さを認めて、神様の御前で自分を低くし、へりくだることが大切です。

そして礼拝においては、私たちの羊飼いである神様の御言葉を聞くことが大切です。御言葉を聞く時には、心を頑なにせずに、私たちが神様について何を信じなければならないか、神様が私たちに何をもとめておられるかを、しっかりと聞き取らなければなりません。信仰と服従をもって御言葉を聞かなければなりません。

さらに今日は触れませんでした。96:8 には、「**御名の栄光を主に帰せよ。ささげ物を携えて、主の大庭に入れ**」とありますから、礼拝においては「ささげ物」が大切です。それゆえ私たちは、毎週の礼拝において「献金」をささげるのです。

礼拝は、私たちのためだけにあるのではありません。礼拝は、神様のためであり、全世界の人々のためにあります。それゆえ私たちは、自分たちの幸せや必要や交わりのために礼拝をするのではなく、すべての人の救いのため、すべての人を礼拝に招くために、礼拝をしていかなければなりません。礼拝は、人間だけに求められるものではありません。96:11-12 にはこうあります。「**天は喜び、地は小躍りし、海とそこに満ちているものは、鳴りとどろけ。野とそこにあるものはみな、喜び踊れ。そのとき、森の木々もみな喜び歌う。主の御前で**」。神様は、神様が造られたすべてのものが神様を礼拝することを求めておられるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは私たちに礼拝を求めておられます。あなたが求めておられる礼拝は、賛美とへりくだりとささげ物、そして御言葉を聞くことにあります。私たちが決して心を頑なにせずに、真実に感謝と喜びと、信仰と服従をもってあなたを礼拝することができますように。

また私たちの礼拝を通して、多くの人々をあなたの礼拝へと招くことができますように。この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。